

ウィグルと吐蕃の北庭爭奪戰及び

その後の西域情勢について

森 安 孝 夫

唐朝の内陸アジアにおける勢力はその盛時においては西方深く北庭・西州（トルファン）・安西四鎮の地方にまで及び、唐はこれらの地方を縦貫する通商路を完全に掌握して、そこからあがる利益を独占していた。ところが恐らくは安史の大亂が漸く治まりかけた頃から吐蕃の勢力が急速に北上を開始し、⁽¹⁾ためにこれら西域地方と唐本国との交通は断絶を余儀なくされた。こうした情勢を打破すべく建中二年（七八一年）唐の伊西北庭節度使李元忠と四鎮節度留後郭昕とは、天山北路から漠北のオルホン河流域を迂回するいわゆる「ウィグル道」に道を仮りて本国に使者を派遣してきた。それまでも幾度か使者の派遣は行なわれたのであるが、それらは吐蕃の妨害にあつたらしくいづれも失敗に歸していた。それがウィグルの本土内を通過する道を利用することによって初めて成功し、久方振りに両者間の連絡がとれたわけである。この時の模様を旧唐書は次のように伝えている。

（郭昕）肅宗末、為四鎮留後。自関隴陷蕃、為虜所隔、（中略）昕阻隔十五年、建中二年（七八一年）、与伊西北庭節度使李元忠、俱遣〔使〕于朝。德宗嘉之。詔曰、四鎮二庭統任西夏⁽²⁾五十七蕃、十姓部落。国朝已来、相次率

職。自関隴失守、東西阻絶。忠義之徒泣血相守、慎固封略、奉尊朝法。皆侯伯守將交修共理之所致也。伊西北庭節度使李元忠、可北庭大都護。四鎮節度留後郭昕、可安西大都護四鎮節度使。
卷一
二〇 郭昕伝

ところがこれ以後北庭・安西地方は、いわば当然の結果として、ウイグルの間接的ではあるが強力な支配下に入ることになるのである。この地方が東西交通史上及び内陸アジア政治史上に占める重要な地位については今更言うまでもない。いわゆる河西回廊の大半をすでに手中に収め、さらに北上せんと虎視眈々たる強国吐蕃と、安史の乱鎮圧に大功あつて以来ますます勢力を拡大してきた北方の雄ウイグルとが、この地において干戈を交えるに至るのは最早時間の問題であつた。そして遂に貞元五年（七八九年）冬、ここにいわゆるウイグル対吐蕃の北庭争奪戦は開始されたのである。この争奪戦について我国では既に多くの先学の研究があるが、それらのほぼ一致した見解によりつつ事件の経過をみると、次のようである。

建中二年（七八一年）以後北庭・安西地方は、前述したような理由からウイグルの勢力下に入ったが、なかでも北庭に対するウイグルの徴求は熾烈を極め、その地の人々は平生からウイグルに対し浅からぬ怨みを抱いていた。

一方、北庭の近くに拠つていた沙陀部族や、以前からウイグルと通和していたカルルク（葛邏祿）、白服突厥等の諸部族もまたウイグルの日常的な掠奪行為に苦しんでいた。安部健夫氏の言葉を借りて言えば、「天山の北麓にわだかまっていた、そのようなアンチウイグルの氣勢は、多分経済・商業上の理由からであろう、かねてこの地方の把握を野望していたチベットには何よりの附け目であつた」⁽⁴⁾わけである。そしてついに貞元五年（七八九年）の冬、吐蕃はカルルク・白服突厥及び沙陀族の一部を率いて北庭地方に攻め入り、これに対して、ウイグル側は時の大宰相

イル・ユゲシ(頡于迦斯, *Ti:ga:si*)を派遣して救援させ、ここに足かけ三年にわたる戦いの幕が切って落された。しかしながら戦況はウイグル側に不利で、ウイグルは、翌貞元六年(七九〇年)春の戦闘で大敗を喫し、さらに折悪しく、本国で忠貞可汗がその弟に暗殺されたという報を受け、イル・ユゲシは一時戦場を離れて本国に帰還せねばならなかった。当時国内随一の実力者であった彼はすぐさま国内情勢を安定させると、同年秋には国中の丁壯五万人を悉く引き連れ、さらに唐の北庭節度使御史大夫楊襲古の軍隊と合流して、再び北庭救援に向った。ところが今度もまた、吐蕃・カルク連合軍に不意を衝かれて、死者大半、楊襲古の余衆も僅かに百六十というまことに無惨な敗戦を喫したのである。以前からウイグルの徴求に苦しんでいた北庭の人々は、ここに至って自ら城を挙げて吐蕃の軍門に降り、ウイグル側に立つて戦っていた沙陀部族の一派もまた降伏した。つまり北庭地方は一時的にせよ完全に吐蕃の手に帰したわけである。だがウイグルもこのままでは到底引きさがれなかった。なぜなら、ウイグルにとって北庭を失なうことは必然的にその南に位置する西州(トルファン)をも手放すことであり、これら二つの東西交通の要地を喪失することは遊牧ウイグル帝国の存立基盤ともいべき国家財政を根本から揺さぶり、ひいては帝国の存在そのものをも脅す重大問題であったからである。そこでこの最終的結着は貞元七年(七九一年)にまで持ち越されることになるのであるが、その結果についてはウイグルが勝利したとする説と、その逆であったという説とがある。これに関しては後でふれることにして、今は保留する。

我国で一九五九年までに一応出揃っていたこのような学説に対し、一九六四年、ハンガリーの Hilda Esedy 女史はこれらとかなり異なる見解を発表した。それが "Uigurs and Tibetans in Pei-T'ing (790-791A.D.)" (Acta

Orientalia, Hunga. vol. XVII, pp. 83~104)である。本論文は題名からも推測される通り今問題になっている北庭争奪戦の実相を、旧唐書を主とする漢文史料から明らかにしようとして試みたものであり、わずかに二十ページ余りの小論ではあるが、細かい点にまで神経のゆきとどいた好篇である。この事件について記した漢文史料には両唐書のほか、資治通鑑・唐会要・冊府元龜(外臣部)・文献通考などがあるが、これらの記事には幾つかの重要な語句に異同がある。とくに事件の経過を示す年代・日付が不明瞭だったり、誤ったりしているために、ともすれば誤解を招きやすい状態にあった。そこで女史は本論文においてこれらの点について綿密な考証を行なったわけである。それゆえこの論文は、とくに欧米の学界に寄与するところ大であり、既にオーストラリアの Colin Mackerras の "The Uighur Empire according to the T'ang Dynastic Histories," (Canberra, 1972)⁽⁹⁾ の中にも幾度か引用されている。

ところで、先に紹介した我国の学者の見解と、Ecsedy の見解との根本的相違は次の一点にある。即ち旧唐書廻紇伝の

是歳(貞元六年)吐蕃陷北庭都護府。初北庭安西既仮道於廻紇以朝奏。因附庸焉。□□徵求無厭、北庭差近、凡生事之資必強取之。

△旧唐書^{卷一}九五 廻紇伝▽

という文の空白の部分に、「廻紇」の二字が入るか、それとも「吐蕃」の二文字を入れるべきか、という問題である。我国の学者がすべて「廻紇」説をとっているのに対し、女史は「吐蕃」説を主張したのである。そして先に紹介した Mackerras もその著の初版⁽⁶⁾においては「廻紇」説をとっていたにもかかわらず、昨年(一九七二)出版された改訂新版においては女史の説にそのまま従って、氏自身の旧説(旧訳)を改めているのである。「吐蕃」か「廻

紇」かというこの問題は、一見まことに些細な事のように思われるが、その実、結論のいかんによっては當時の天山東部へ北部地方の政治情勢の見方に関し、全く逆の立場に身を置くことにもなるのである。そこで私は、欧米の学界にたいして影響の大きいこの論文を取りあげ、女史の新説を検討したいと思う。便宜上、まず最初に旧唐書吐蕃伝の記事から掲げることにする。

〔貞元〕六年、吐蕃陷我北庭都護府。初北庭安西既假道於廻紇朝奏。因附庸焉。蕃性貪狼、徵求無度、北庭近羗、凡服用食物所資必強取之。人不聊生矣。又有沙陀部六千余帳、与北庭相依、亦屬於廻紇。廻紇肆其抄奪、尤所歎苦。其葛祿部及白服突厥素与廻紇通和、亦憾其奪掠。因吐蕃厚賂、見誘遂附之。於是吐蕃率葛祿白服之衆、去歲各來寇北庭。廻紇大相頡干迦斯率衆援之。頻戰敗績。吐蕃攻囲頗急。北庭之人既苦廻紇。是歲乃舉城降於吐蕃。沙陀部落亦降焉。北庭節度使楊襲古与麾下二千余人出奔西州、頡干迦斯不利而還。七年秋又悉其丁壯五六万人將復北庭。仍召襲古偕行。俄為吐蕃葛祿等所擊。大敗、死者大半。頡干迦斯給之曰、且与我同至牙帳當送君歸本朝也。襲古從之及牙帳、留而不遣。竟殺之。自是安西阻絕、莫知存否。唯西州之人猶固守焉。頡干迦斯既敗衄。葛祿之衆乘勝取廻紇之浮図川。廻紇震恐、悉遷西州部落羊馬於牙帳之南、以避之。

△旧唐書 卷一 吐蕃伝・下▽
九六

以上の全文を女史は英訳しているが、ここでは問題となる「因附庸焉……………人不聊生矣」(文中傍点箇所)の部分の翻訳を引用しておく。

“(前略) they had belonged to our provinces. The Tibetans (蕃 *fan*) were of greedy and cruel nature;

in their demands there was no measure. Pei-ting was near the 羌 *Ch'iang* [tribes]; they took by force all the clothes and food and everything, necessary for living, from them [i.e. from the inhabitants of Pei-ting]; people had nothing to live on."

これによると女史は、「因附庸焉」の「焉」を唐王朝とみなし、「蕃性」を「吐蕃民族の性格・性質」とみて、「微求無厭」の主語は吐蕃であると解釈し、そして「北庭近羌」は、これを文字通りに解している。ところがこの吐蕃伝の記事と対応する廻紇伝の記事は、既に引用したように、次の如くである。

初北庭安西既叛道於廻紇以朝奏。因附庸焉。吐蕃微求無厭、北庭差近、凡生事之資必強取之。

先に引用した際空白にしておいた箇所に「吐蕃」の二字が入っているのは、実は百衲本に依ったからである。しかるに一方殿版の方を見ると、この部分は「廻紇」という文字に書き改められている。その理由は巻末に付された「按新書作回紇。觀後云、北庭之人既苦回紇、乃拳城降。則吐蕃當作廻紇、無疑。今改正。」という殿版編者の考証より明らかである。もしこの殿版編者の見解が正しいとすれば、Ecsedy が「吐蕃民族の性格・性質」とみなした「蕃性」は、ウィグル族のそれということにならねばならない。しかるに、両唐書のうちでは旧唐書を、旧唐書のうちでも百衲本の方に絶対的信頼を置く女史はあくまで「吐蕃」の方を正しいとみるわけである。要するに、「微求無厭」の主語は「廻紇」か「吐蕃」かというまさにこの一点に論点は絞られて来るのである。

そこでまず、今一度上に引用した英訳とその原文をみてみよう。先にも述べたように女史は「因りて焉に附庸たり」の「焉」を唐王朝 (our provinces) とみた。それは、原文を「以前北庭と安西がウィグルに道をかりて朝廷

に使者を派遣してきた。それゆえに北庭・安西地方は我が国に附庸することになったのである」と解釈したがゆえに他ならない。Pelliot も *“ils restaient ainsi dans la dépendance(?) de l'empire”* (彼らはこうして帝国の属国? のうちに入っていた) と訳している⁽⁸⁾、という⁽⁹⁾。しかしこの読み方は不可能である。なぜなら北庭と安西は唐の都護府の置かれた所であって決して外国ではない。安西都護府は六四〇年より、北庭都護府は七〇二年よりすでに設置されていたのであるが、安史の乱勃発による唐朝の弱体化と吐蕃の河西占領とによって、これらの都護府と唐本土との通交はしばらく途絶していたが、ウィグルの領土内を通過して使者を派遣したことによって再び連絡がとれるに至った、という背後事情を念頭において上掲史料を理解すべきである。そうすれば、「それゆえに北庭・安西地方は我が国に附庸することになった」と訳すのが、いかにも不自然なことに気付くであろう。「焉」とは明らかにウィグルを指すのであり、そのことはすでに羽田亨氏も安部氏も指摘しているところである⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾。

女史はまた「蕃性貪狼、徵求無度」の「蕃」を「吐蕃」と解し、「徵求無度」の主語も吐蕃であるとみた。唐会要^{卷七} 安西都護府条には「蕃性貪獸、徵求無度」とあり、新唐書回鶻伝には「虜求取無厭」と、そして旧唐書廻紇伝の百納本には「吐蕃徵求無厭」とあるのであるから、女史がそのように推測したのも無理はない。前述したように、殿版ではここが「廻紇」と訂正されているのであるが、この点に関しては後でもう一度触れる。

そこで次に「北庭近羌」の一句に眼を転じてみよう。女史はもちろん字面どおり「北庭は羌(族)に近かった」、あるいは「北庭の近くにいた羌は」と解した⁽¹³⁾。そして旧唐書廻紇伝の「北庭差近、凡生事之資必強取之」という記事に関しては、「凡そ生事の資は必ず強取した」のが誰か記されておらず、「北庭差近」などという表現そのものも

“not usual” だとしてこれを斥けた。さらに、当時ウイグルは北庭ないしその周辺を支配下に入れており、その地方はいわば「ウイグル国内」であったわけだから、「北庭がウイグルに近い」などと言うはずがない、とも言っている。そして、もともと「初北庭安西……蕃性貪狼、徵求無度、北庭近恙……人不聊生矣」とあった吐蕃伝（ないしその原典）の記事を最初は廻紇伝も踏襲していたが、後の人が廻紇伝だけをみて、この部分にチベット系の羌族が登場するのはおかしいと考えて「北庭差近」と改竄し、それが今日にまで伝わったのだらう、と推測した。そしてさらに、このことは即ち廻紇伝が、少くともこの部分においては、吐蕃伝（ないしその原典）に基づいて書かれたものであらう、とした。そのことの傍証として女史は次の点をあげる。

先に引用した旧唐書吐蕃伝の記事には、「頡干迦斯不利而還」という文がある。これが旧唐書の廻紇伝では「頡干利亦還」となっている。廻紇伝では直前の部分で頡干迦斯（イル・ユゲシ。干は于の誤り）という名前（称号）も使われているのだから、この「頡干利亦還」は吐蕃伝の記事を誤って短縮したものにちがいない。即ち、吐蕃伝の記事の方が廻紇伝のそれに先行するものである。

しかし本当に吐蕃伝（旧唐書^{卷一}九六）の方が廻紇伝（旧唐書^{卷一}九五）より先に完成し、かつ後者は部分的にせよ前者をもとにして書かれたのであらうか。未だ疑問である。

Esady があくまで「北庭近恙」の方が正しいとするのには、もちろん先程みた「蕃性」吐蕃の性格・性質「説がいま一つの重要な根拠となっている。百衲本の旧唐書廻紇伝には「吐蕃徵求無厭、北庭差近、凡生事之資必強取之」とあり、これが殿版では「廻紇……」となっているが、これは清乾隆帝時代の殿版編者が自ら訂正したものである

ことは、前述した如くである。即ち殿版の編者の拠った版本にもここは吐蕃とあったことが確かである。しかしだからといって、成立当初の旧唐書廻紇伝にもそうあったかどうかは必ずしも明らかでない。なぜなら何度も繰り返すことになるが、旧唐書吐蕃伝の方には「蕃性貪狼、徵求無度」とあったのであり、ほぼ同時代に成立した唐会要の卷七三にも「蕃性禽獸、徵求無度」とあって、決して吐蕃とはなっていないからである。蕃性の蕃が必ずしも吐蕃と同じでないことは、例えば、旧唐書廻紇伝貞元六年六月の条に「廻紇使移職伽達干帰蕃、賜馬廐絹三十万匹」とある蕃が決して吐蕃をさしているのではない、ことから察せられる。女史の言うように、旧唐書の廻紇伝が吐蕃伝に基づいているとみるより、両方ともに同一の原史料に基づいていると考える方が自然であって、恐らくその原史料（唐会要もまたそれに依ったものだろう）には「蕃性」とあったに相違なく、それが時を経るうちに「吐蕃」と書き換えられたのではなからうか。旧唐書や唐会要到約一世紀遅れて成立した新唐書や資治通鑑の編著者がともに「吐蕃」ではなく「ウイグル」が北庭地方より物品を略奪したとしているのは、やはり根拠があったのことであろう。彼らは旧唐書や唐会要以外の史料をも十分に使用できたはずであらうから。

しかしなんと言っても最終的判断は文章全体を鳥瞰する立場からなされなければならない。旧唐書吐蕃伝・同廻紇伝・唐会要はすべて、まず貞元六年（七九〇年）に「吐蕃が北庭都護府を陥れた」という事実を述べ、次いでそのような結果を招くに至った背後事情から説きおこし（発辭はいずれも「初」、前年（七八九年）の冬における戦闘の開始、さらにはその後の事件の経過とその一応の（即ち七九〇年内の）結末を述べて終っている。本稿で問題になっている箇所は、背後事情を述べているのはじめの部分にある。

その背後事情と事件の経過の前半とは次の如くである。

かつて吐蕃の進出によって朝廷との連絡を絶たれた北庭都護府及び安西都護府からの使者が、北方を迂回する所謂「ウイグル道」を通じて朝廷にやって来た（七八一年）。それゆえ以後北庭・安西地方はウイグルに附庸することになった。ところがウ、イ、グル（女史によれば吐蕃）は貪欲であつて、その徴求には際限がなかった。とくに北庭地方はウ、イ、グル（女史は吐蕃とする¹⁵）と接近しており、ウ、イ、グル（女史は吐蕃とみなす）は北庭地方の人々からあらゆる生活必需品を強奪したので、人々は生きた心地もしなかった。一方、沙陀部族の六千余帳も北庭付近を中心に遊牧生活をおくつていて、やはりウイグルに属していたが、これまたウ、イ、グル（女史も同意見）の掠奪に苦しんでいた。さらにカルルク及び白服突厥も同様な状態にあつた。それゆえ吐蕃はこれらのウイグルに恨みを抱く諸部族に賄賂をおくつて味方につけようとした。そして吐蕃は去年（七八九年）の冬のこと、カルルク及び白服突厥を率いて北庭に來襲した。ウイグルの大首領イル・ユゲシは兵を率いて北庭を救援（原文には援之とある。この句に関しては諸史料はほぼ一致している）に來たが、吐蕃らの急襲にあつて惨敗した。北庭の人々はそれまでにウ、イ、グル（女史も同見解）の徴求に苦しんでいたので、まもなく城をあげて吐蕃に降つた。沙陀族もまた吐蕃に降つた。

もし北庭の近くにあつて北庭から生活必需品等を略奪していたのがウイグルではなくて、女史の言うように吐蕃であつたとすると、全体の意味は一貫するであろうか。女史は北庭がウイグルの支配下にありながら、且つ吐蕃の徴求に甘んじていたと解しているわけであるが、当時の吐蕃—ウイグル関係を考える時、そのような可能性は絶無に等しい。吐蕃がそれまでの苦悩の元兇であつたのなら、北庭の人々は最後までウイグルに付いているはずで、城を

あけて吐蕃に投降するはずは決してないのである。それゆえイル・ユダシが「率衆援之」(資治通鑑だけは「將兵救之」とする)したのを、「led troops to reconquer [Pei-t'ing]」と訳するのは明らかに誤りである。援=「reconquer ではないのである。この「援」はあくまで「助ける」の意であり、北庭地方がウイグルの支配下にあったからこそ、その地が吐蕃の攻撃を受けるやすくまウイグル軍が「来援・救援」した、と解してはじめて意味が通じるのである。だから百衲本の旧唐書廻紇伝に「吐蕃徵求無厭、北庭差近………」とあったのを、殿版の編者が「廻紇徵求無厭、北庭差近………」と改めたのは正しいと言わねばならない。つい最近両唐書ウイグル伝の訳注を発表した佐口透氏もまた、「前後関係からみて『廻紇』とするのが合理的である」と述べておられる。⁽¹⁹⁾

ところがこの佐口氏とはほ同じに両唐書ウイグル伝の英訳(前述)を出版したオーストラリアの Mackerras⁽²⁰⁾ Esedy (及び Pelliot) の説の方を正しいとしているのである。その氏は “Abe Takeo believes that the original sense of the passage was as it survives in CTS (旧唐書) 196 B (吐蕃伝), namely that Pei-t'ing was close to the Tibetans and that it was they who were making insatiable demands and seizing the living necessities of the people. He claims that *Ssu-ma Kuang* (司馬光) altered this original meaning; and that the CTS 195 (廻紇伝) phrase ‘*Pei-t'ing being the closer*’ (北庭差近) is a misunderstanding. See Nishi-Uiguru *Kokushi no Kenkyū* (『西ウイグル國史の研究』), pp. 159-60.” と書く。あたかも安部氏そひなの Esedy の説と同じであるかのように記している。しかしこれは安部氏の著書の原文をみれば明らかのように Mackerras の誤解である。安部氏の訳は、「北庭は羌〔チベット族〕に近い。(ウイグル人はそこから) 衣るもの食うもの、要

るものは何でもきつと強取したので、人々は生きた空もなかった」となっており、「北庭近羌」の一句については、「北庭差近」(廻紇伝)と「北庭去回鶻尤近」(資治通鑑)とする史料のあることを紹介し、後の二つの方がよいかも知れないが、前の中でも意味が通らぬことはない、と言っているだけである。⁽¹⁸⁾ 安部氏もまた殿版編者の改正を支持しているのである。羽田氏はこの百衲本と殿版との差異について一言もしていないが、氏の引用史料にもやはり「吐蕃」ではなく「廻紇」となっていること⁽¹⁹⁾からみて、その立場は明白である。

以上、私は百衲本に絶対的信頼を置く Ecsedy の所説の一端を検討し、結局百衲本にも誤りのあることを指摘したのである。

次に、先ほど保留しておいた北庭争奪戦の最終的な結末及びその後の大局的な趨勢に関する二説について少しく考えてみよう。まずその結末の方に關して直接的な決め手となるのは次の記事だけである。

貞元七年(七九一年)八月、廻紇遣使、獻敗吐蕃葛禄於北庭所捷及其俘畜。△旧唐書^{卷一}九五 廻紇伝▽

是歲(七九一年)回鶻擊吐蕃葛禄於北庭、勝之、且獻俘。△新唐書^{卷二}一七 回鶻伝・上▽

羽田氏及び安部氏はともにこれらの記載に信頼を置き、一旦は吐蕃の手に渡った北庭も、結局は再びウイグルの支配下へと戻った、と考えた。ところがこれに反して田坂興道氏はこれら⁽²⁰⁾の記事を、回紇が自己の敗戦の醜態を糊塗すべく行なった捏造の報告によるものとみなし、北庭争奪戦の最終的勝利者はウイグルではなく吐蕃であるとした。そしてこの見解を受け継いだ佐藤長氏⁽²¹⁾はさらにそれを発展させて、北庭争奪戦以後ウイグルは漸次弱体化の道を辿っていたが、逆に吐蕃の方はトルキスタンにおける支配権を益々確立していった、というふうに当時の西域情勢

を大まかに捉えているのである。⁽²⁴⁾ところで Ecsedy はこの問題に関してはとくに考証を加えてはいないのであるが、当時の一般的情勢を述べ、⁽²⁵⁾“These territories fell into the hands of the Tibetans, and the Uigurs——despite some temporary successes——could not dislodge the Tibetans. It was some decades later that flying from the Kirghiz troops they finally succeeded in doing so (about 840).”⁽²⁶⁾と述べていることからして、田坂・佐藤両氏の説と同じであることは疑いがない。しかし実際にウイグルは、八四〇年にキルギスの攻撃を受けて四散し、その一部（といってもかなりの部分）が北庭・安西地方に西遷してくるまで、この地方を吐蕃の手に委ねたままに放置していたのであろうか。私にはそのようなことはありえなかったと思われる。第一、もし女史らの言うところが正しいとすれば、キルギスに打ち破られたウイグル族の多くが落ちのびる方向として、旧来の大敵吐蕃の拠っている地方を選ぶというのは、いかにも不自然である。やはり北庭・安西地方は、北庭争奪戦後もひきつづきウイグルの、時には強力な、そして時には緩やかな支配の下にあったとみる方が自然なのではあるまいか。

もちろんこのような見方をするのは筆者の独創ではなく、安部氏がその大著の随所で強調してきたところである。氏はウイグル側の原地史料を十分に駆使する中から、このような説を導き出してきたのであって、その説はかなり信憑性を持つと考えてよい。氏の掲げたウイグル側史料の中には、例のカラールバガスン碑文中のいわゆる「天可汗」の西方大遠征を伝える記事も含まれているが、これなどは当時の西域（少くとも天山北部地方）におけるウイグルの優勢を物語る最たるものであろう。また F.W.K. Müller⁽²⁷⁾ によって紹介された Mahmānag と呼ばれる中世イラン語で書かれたマニ教讚美歌集の残巻⁽²⁸⁾からは、保義可汗⁽²⁹⁾（八〇八年～八二二年在位）時代において少なく

この北庭・高昌地方までが、⁽²⁸⁾ Henry の説を信ずれば焉耆から亀茲を越えて遠くカシユガル（疎勒）までもが、ウィグル可汗の威令の及ぶ範囲であったことが推定されるのである。安部氏が挙げているいま一つの史料は、
T. II. K. Bündel Nr. D. 173 という分類番号をもつ次のような内容の一文書断簡⁽²⁹⁾である。

[Doppelblatt I(?), Blatt 1, Seite 2]

(前欠) tängrikän uirur burur xan xočo-raru kalpän xoi-n yilqa üc maxi-stak
テングリケン=ウイグル=テググク=ハンは 高昌へ 来りて 羊の歳に 三人の マヒスタクを

olurmaq ücün mužakkä kingädi◆

設置する ために 慕闐に 相談した。

このムサスル burur xan を牟怛臣⁽³⁰⁾は(ヤサガ年～ヤサ九年在位)と云ふ⁽³¹⁾ Le Cog, Bang, Gaban, 田坂⁽³²⁾は(33)「羊の歳」をヤサ七年(丁未)とみたが、安部氏はこれを八〇三年(癸未)としたわけである⁽³⁴⁾。burur xan が牟怛臣⁽³⁵⁾でないことは音韻上からみても勿論のこと、⁽³⁶⁾他のウィグル文書との内容的関連からみても明らかであつて、私もこの見方には賛成である。(慕闐・マヒスタクは共にマニ教の高僧で慕闐はその最高位。後出の ispasag はこれに次ぐ。)次に安部氏の言及されなかつたウィグル側の史料を一つだけあげておく。

[Blatt 2, Rückseite, ZZ. 13~20]

ymä tängri mani burxan tängri yiringärü barduqinta kin bis yuz artuqi äki-i o'uzunč lažın yil-qa
そして 聖なる マニ 仏が 天国へ 赴きしより 後 五百 二十二年の 豚の歳に

ウィグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について 森安

ötükäntäki nom ul-'ur'i tökäl ärdämliḡ yarl-aṛ-qancuēi bil-gä bäḡ tängri mar niw
 uṭa-ṭen'in 教義の長、完全なる徳もてる 慈悲深き ビルダ＝ベクガ、テングリ＝アル＝ニウ＝
 mani maxi-stakka ai-ṛ'in bu äki (幾欠)

マニ＝アル＝スタクに言葉もてこの二つの

この史料は⁽³⁵⁾トルファンから発見されたものとして T.H.D. 173 a² の記号を⁽³⁶⁾「Bitil-ti Šakimun Burxan Kälmaḡi Nom.」即ち『書かれたり、釈迦牟尼仏の来迎の書なり』という表題をもつてある文書の奥書の一部である。Gabain がこれを二宗經の一部であると断定した Pelliot・Chavannes 両氏の説を否定したのは正當であるが、⁽³⁷⁾なりとつこれを仏典の一部であると速断することも許されない。Le Coq がこれを⁽³⁸⁾「Türkische Manichaica aus Chotscho.」と題する書物の中に収めた通り、これは明らかにマニ教文書の一部であつて、元來仏教をも含む折衷宗教たるマニ教が東伝する際に、仏教の盛んな地方においてはあたかも仏教の一派であるかの如く浸透していったことを示すものである。⁽³⁹⁾問題はこの文書に現われる「豚の歳」であるが、それは教祖マニが死没してから五二二年後にあたるというところマニの死亡年代に関しては諸説紛々としていて定かではないが、⁽⁴⁰⁾二七三―二七六年の間のこととすればほぼ間違ひなく、これに五二二年を足すと七九五―七九八年になる。この間にあつて「豚の歳」といえば、七九五年が「乙亥」に当るので、この文書の紀年は確定する。すると七九五年にウィグルの本營のあるウチュケン地方にマニ教の高位聖職者（恐らくは ⁽⁴¹⁾ispasag）がいたということになり、これはウィグル国内におけるマニ教信者の広汎なる存在（とくに支配階級あるいは城郭の民の間において）を前提としたものであると考へてはほとんど誤りはない。

い。逆に言えば、当時の内陸アジア世界でただ一人マニ教を国家的に保護⁽⁴⁴⁾していたウイグル帝国の力が、トルファン地方までは確実に延びていた^(cf. 36)ことをも証明するものであろう。

紙数の制限上、ウイグル側史料をすべて引用し、自説を全面的に展開することができないのを遺憾とするが、当時の西域情勢を伝える史料はアラビア側にもあるので、そのうちの一つを簡単に紹介しておく。それは Ibn al-Faqih や Yaqut の著述の中にその佚文が残されている Tamim ibn Bahr の旅行記である。Minorsky によれば⁽⁴⁵⁾、彼は八二〇年前後に或る任務を帯びてウイグルの本拠(氏はオルドゥーバリク即ちカラールバルカッサンとする)へ旅したイスラーム教徒であるという。この旅行記はタラス付近にあったと思われる下バルスハンを出発した彼が、Toruzruz の可汗の国へ可汗から差し向けられた駅通馬に乗って、一昼夜に三つの宿駅を過ぎて行くほどに急いで旅をしたことを伝えている。ここに言うウイグルの本拠がオルドゥーバリクであったか北庭であったかは暫く置いて、彼が天山北路を通ったこと、その地方には Turuzruz の可汗の威令が及んでいたこと、そしてその Turuzruz とはウイグルを指していること等はすべて旅行記の内容に照らして明らかである。それゆえこの史料もまた当時の天山北路地方においてウイグルの勢力が優勢であったことを物語るものとみてよい。

以上のような理由から私には、田坂氏や佐藤氏のように、七九一年のウイグルの吐蕃撃破を伝える記事をウイグル側の捏造の報告とみなし、北庭戦以後ウイグルは漸次弱体化しつつあったと考える必然性は存在しないように思われる。しかしここで当然氏らの反論が予想される。それは旧唐書吐蕃伝に次のような記事があるからである。八二二年、唐蕃会盟のために吐蕃を訪れた唐使劉元鼎に対し吐蕃の宰相は、「廻紇小国也。我以丙申年(八一六年)

餘磧討逐去其城郭二百日（殿版作二日。新唐書作三日）⁽⁴⁶⁾ 程計、到即破滅矣。會我聞本国有喪而還。廻紇之弱如此。」と語ったという。田坂・佐藤両氏はここにみえる「其城郭」をウイグルの本拠オルドゥーバリク（カラールバルクス）とみている。⁽⁴⁷⁾ しかしこのような見方は、八一六年という年代が唐代ウイグル史上に占める位置を考えあわせるとき、到底受け入れられない。その理由は先に掲げた史料だけからさえ明らかであろうから、ここでの詳述は避ける。佐藤氏らは「餘磧」の「磧」をゴビ砂漠西辺とみたわけであるが、これはロプノール周辺ないしここから焉耆に至る間に横たわる沙漠を指したものに相違ない。なぜなら、吐蕃は東部天山地方に進出するの、鄯州から河西回廊を西進したとみるより、ツアイダム南辺を通じてロプノールの南に出、そこから北進して焉耆地方に至る道をとったと考える方が自然だからである。⁽⁴⁸⁾ すなわち、北庭争奪戦で吐蕃が一時勝利を占めた時、敗れた楊襲古の軍は西州（トルファン盆地）へ逃げ込んでゐるし、また吐蕃はこの戦いに先立ってカルルク・白服突厥等と緊密な連絡をとっていたのであって、これらの事実は明らかに吐蕃の軍がトルファンを通過せずに北庭に達したこと、且つそれ以前に吐蕃軍は天山の北側にいた遊牧諸部族と容易に連絡がとれる地域に位置していたことを推測せしめるものである。なお、同じ砂漠を指す言葉でも「沙」と「磧」とはその内容が違うことを、かつて松田壽男氏より御指摘いただいたが、唐代、ロプノール北辺から焉耆地方に向う道が大磧路と呼ばれていたという事実は私の推測の傍証となるであろう。

ここでこれまで述べて来た所を簡単にまとめておく。ウイグル対吐蕃の北庭争奪戦は一時的には吐蕃が勝利を収めたが、最終的にはウイグル側の勝利に帰した。そしてこれ以後ウイグルの勢力は徐々に衰退していったのでは決

してなくして、大局からみればむしろ政治的にも宗教的にも、さらにはマニ教徒ソグド人⁽⁵⁰⁾を掌握することによって経済的にも相当の支配力を、西域東部に及ぼしていたと思われる。ここに言う西域東部とは主に天山東部と北部地方を指すのであって、八世紀末と九世紀前半においては恐らくは、天山南路の北道地帯を緩衝地帯あるいは係争地帯として、トルファン盆地を含めたそれ以北はウイグルの、そして河西回廊とタリム盆地南縁部は吐蕃の勢力下⁽⁵²⁾にそれぞれ置かれていたと考えられるのである。(ただし、九世紀中葉吐蕃が一時的にトルファンに進出した可能性についてはこれを認めるが、今それに言及する余裕はない。)

私の言わんとする所は、以上でほぼ尽きるのであるが、本論の内容と密接不可分の関係にある史料がペリオ文書の中に含まれていることを、最近土肥義和氏から指摘されたので、以下それについて触れておく。その史料とは『金剛壇広大清淨陀羅尼經』(Fonds Pelliot chinois 3918)の跋文で、昨山上山大峻氏によってその全訳を添えて紹介されたものである⁽⁵³⁾。次にその全文を再録する。番号は便宜的に筆者が付したものである。

(1) 此金剛壇広大清淨陀羅尼經、近劉和尚、法諱曇倩、於安西翻訳、至今大唐貞元九年、約卅年矣。(2) 是諸仏如来大乘秘密了義之勝因、亦乃衆生修行解脱之捷徑。于闐安西合国、今見弘持。自此向東、未聞宣布。(3) 即有捨官入道比丘僧利貞、俗姓李、字曰平須。頃(上山作往)西州長史兼判前庭臬事日、因遇此經、深生渴仰、作大利益、広欲流通。紙写恐年紀遷變、法教將虧、遂割減俸料之余資、敬於彼州妙德寺宝方、像祇園之買地、創造精室、徵召良工、鐫礪貞石、崇写斯經、将伝不朽。(4) 彦賓為居、部属見此勝緣、聿来随喜、助写碑經。其經本約有廿三紙、字数稍広、欲写恐長短竿料不周。数日憂惶、未能題作。忽於夜夢、有一老人報言、爾若写此石經、

ウイグルと吐蕃の北庭爭奪戰及びその後の西域情勢について

森安

毎行書五十五字、不須疑慮。豁然驚悟、尋此夢言、更不計竿、決意便書。至信奉行、唯殘兩行。題記年月日、兼及施主名号、亦無一字余剩。信知聖力冥加、善神潛助、拋斯感応、足為徵驗。(5)其經梵本、在于闐藏中。有一小僧、於藏取來、開誦不信、毀些便唾。隔牆拋棄其夾、掛在樹上。其夜洞徹放光、举国咸見。其僧悔恨、投於樹下、碎身自戒、求哀懺悔。其時有二百余小乘僧、並捨本業、歸向大乘。自爾僧俗諷誦弘持。其次有一僧、受持此經。臨終於澡濯、口上正念、結跏而逝。諸如勝境、其數寔繁、不能具載。(6)其經去年西州頃陷、人心蒼忙、收拾不着、不得本來。(7)乃有同行僧広林、先日受持、昨於沙州、略有諷誦。僧俗忽聞、欣歛頂戴、咸請留本、相伝受持。(8)今次居甘州、未有聞者。遂請広林闡梨、附口抄題、将伝未曉。見聞之者、普願弘持、広令流布。癸酉歲十月十五日、西州没落官甘州寺戸唐伊西庭節度留後使判官朝散大夫試大僕卿趙彦賓⁽⁵⁴⁾。与広林闡梨審勘校、並無差謬。普願宣通、作大利益。其広林俗姓田氏也。(9)乙亥年秋、得向西元本勘。頭辺闕三紙来不得。余校竟。比丘利貞、此本勘後甚定。受持之者、請無疑慮。

上山氏の解釈に従って跋文の内容を順に記すと次のようになる。

- (1) 本經の漢訳は七五三年頃に安西即ち龜茲の地で、曇倩なる人物によって行なわれた。
- (2) 初め本經は于闐及び安西では弘く受持されていたが、それ以後の地方には伝わっていなかった。
- (3) 西州長史兼判前庭臬事の李孚須は本經に深く感銘し、これを永く伝えんとして西州の妙徳寺にこれを石碑に写して留めた。

(4) その後、唐伊西(北)庭節度留後使判官朝散大夫試大僕卿の趙彦賓⁽⁵⁴⁾が西州に来て、部属と共にその石經を書き写した。⁽⁵⁵⁾

(5) 本経のサンスクリット原本はもと于闐の藏中であつたものである。(この節では、本経にまつわるエピソードを載せて、本経受持の功德を強調する)。

(6) 去年(貞元八年、七九二年)西州が傾陥して趙彦寶は没落官となり甘州の寺戸となつたが、混乱のため本経を伝持することが出来なかつた。

(7) 一方、田広林なる僧があつて、沙州でこの経を踊していたところ、僧俗はこれを聞いて仰信し、經典を文字にして普及せしめんことを願つた。

(8) 趙彦寶のいる甘州には未だこの經典は伝わっていないので、流布せしめんとして田広林に請うて、彼から口伝えに書写した。それは癸酉歲(七九三年)十月十五日のことである。

(9) 後、乙亥歲(七九五年)秋、西方の元本を入手した。既に利貞の名で出家していた李爭須がこれによって口伝本の校勘を行なつた。

右の上山氏の解釈は大筋においてはほぼ妥当と思われ、私も敢えて異論を唱えるつもりはない。しかしながら(6)の内容に関して氏が、「(前略)『元和郡県図志』では西州は『貞観(貞元)七年没於西蕃』とあり、貞元七年に吐蕃に敗れたことを記す。いずれにしても西州の陥落は貞元八年頃とみられる。」といわれるの⁽⁵⁶⁾については、私は無条件にこれに従うことは出来ない。なぜなら、もしこの考えをそのまま認めると、七九二年頃以後西州はひき続き吐蕃の支配下にあつたことになり、先の私の結論と食い違ってくるからである。そこでもう一度(6)(7)(8)(9)の内容を検討しよう。そこで言っていることを要約すると、「趙彦寶は西州に本経を置いて来てしまつて今それを手元に持つてい

ない。ところが最近沙州で広林闡梨という一僧が本経を諷誦しているという噂を聞いた。そこで甘州にいた趙彦賓は早速広林に交渉して、彼の口から本経を写し取った。勿論これは広林の記憶に頼ったので不完全な箇所もあった。ところが七九五年には西方から元本（具体的に何かは不明）を手に入れ、具さに校勘することが出来た。この校勘には利貞（李孚須）が「あたった」ということになる。ここで、趙彦賓及び李孚須が西州を捨てて（或いは西州から連れ去られて）吐蕃治下の河西の地に来ていた、という事実注目したい。もともと唐の高級官吏として西州にいた趙彦賓と李孚須とが西州を去ったのは何故であろうか。その理由としては二つの場合が考えられる。一つは、西州が吐蕃に陥れられ、その時あるいはそれから暫くして吐蕃の手で強制的に河西に移住させられた場合、いま一つは、吐蕃に陥没した西州が今度はウイグルの攻撃を受けたので吐蕃軍ともども南の方に難を避けた（或いは吐蕃軍に強制的に連行された）場合である。（北庭争奪戦の時のウイグルと唐との関係からみて、吐蕃の手に落ちたことのない西州をウイグルがいきなり攻めたという可能性はまずない）。前者の場合だとすれば西州が吐蕃の支配下に入ったのは七九二年だということになり、後者の場合だとすれば七九〇年秋以後七九二年以前に吐蕃に没した西州が七九二年にはウイグルの手中に帰した、ということになる。もし後者の場合だとすると、私が本論で述べてきたところと何ら矛盾しないので問題はない。ところが前者の場合が正しく、且つこれ以後も西州は引き続き吐蕃の支配下にあったとすると、これは先の私の結論、即ち、大まかに言えば北庭争奪戦以後は天山南路北道地帯を緩衝地帯（或いは係争地帯）として、西州を含むそれ以北はウイグルの、河西を含むそれ以南は吐蕃の勢力下にあったとする私見とあわなくなる。しかしこれはあくまで「これ以後も西州は引き続き吐蕃の支配下にあったとすると」とい

う前提に立てばの矛盾であつて、もしこの前提が正しくなければ、即ち、一度は吐蕃に陥落した西州ではあるが、その後いくばくもなくしてウイグルの支配下に入つたと考えれば全く矛盾は無くなる。ではその前提は果して正しいであらうか。そこでもう一度跋文に目を向けてみよう。すると、趙彥寶が西州に置いて来てしまつたのと同じ經典を得るために、直接自分で西州に行つて原本を取つて来たり、或いはそれを西州から取り寄せるようなことをしないで、沙州の僧に依頼してその口から不完全な経文を写し取つたという事実が目につく。ではなぜ彼は西州に置いてきた原本を自ら入手しようとはせず、沙州の僧の諷誦していたところから筆写するだけで満足せねばならなかつたのか。私はそれは、彼が西州に置いて来た原本を入手したくても、当時の情勢がそれを許さなかつたからだと考へる。即ち当時吐蕃の強力な支配下にあつた甘州と沙州との間では交通が自由であつたが、これらの地域と西州とはほぼ完全に交通・通信が途絶えていたからであると思ふわけである。その理由はと言へば他でもない、ウイグルがすでに西州を手中に収めていたことにこそ求められなければならないまい。

振り返つてみるに、吐蕃がカルルク等と共に大挙して北庭を攻め、そこを奪い取つたのは七九〇年秋のことであつた。しかしまだこの時点では西州は吐蕃の手に落ちていない。⁽⁵⁷⁾だが吐蕃軍は、ロブノール地方から北上して焉耆地方に達し、さらに東北進して遂に北庭まで占領する一方では、河西回廊を西進してすでに瓜州・沙州から伊州の地にまで支配の手を延ばしていたのである。西州が陥落するのはもはや当然の成り行きで、そしてそれは恐らく七九〇〜七九一年のある時期に起つたのであらう。⁽⁶⁰⁾ところがこのような状況を到底看過しえないウイグルは三たび吐蕃・カルルク連合軍を攻めて、七九一年秋ようやく北庭(の半分?)をとり返したのである。田坂・佐藤両氏がこの

事實を認めないことは前述の通りであるが、しかし両氏が否定するこの七九一年秋の⁽⁶¹⁾記事の他にはウイグルが吐蕃を敗ったことを伝える記事はない。カラールバルガッスン碑文からウイグルが吐蕃を撃破したことが明らかに読み取れ、かつウイグルがこのような誇らしげな勝利を唐に伝えないはずはないことを考える時、やはり七九一年秋のウイグル側からの報告は事実とみなすべきであろう。⁽⁶²⁾ もちろんこの時の戦いの結着がただ一度の戦闘でついたと考える必要はなく、十二月に至ってウイグルが唐に吐蕃の大首領尚結心を献じているところを見ると、この時の戦いも数ヶ月にわたって続けられたのであって、秋の報告はその初期の勝利を伝えたものと思われる。この七九一年秋から冬へ、さらに恐らくは七九二年前半にまで持ち越された戦いの連続の中で、ウイグル軍は遂に吐蕃軍を西州からも追い払い、そこを占拠するに至ったのであろう。跋文の⁽⁶⁾にみえる「其經去年（一七九二年）西州頃陷、人心蒼忙、收拾不着、不得本来」という文は、まさにこの時のことを伝えたものと解釈してよいのではなからうか。そして趙彦賢及び李罕須（利貞）もこの時西州を去って吐蕃軍ともども河西の方に難を避けた（或いは吐蕃軍に強制的に連行された）のであろう。即ち私は先に、もと唐の役人として西州にいた二人が官を失ったり捨てたりして西州を去らねばならなくなった理由として二つの場合を想定しておいたが、そのうちの後者の方により、大きな可能性を認めるのである。だが、ここにもまだ一つ疑問は残る。それは、既に河西回廊に確固とした足がかりを築いていた吐蕃が、今度はそこを基点として逆に西州にいたウイグル軍に反撃することが当然予想されるのに、そうしなかったのはなぜか、という問題である。しかしこの疑問は、当時の吐蕃と唐・南詔関係を考慮する時、容易に氷解するものと思われる。なぜなら、佐藤氏の研究によれば、⁽⁶⁵⁾この頃劔南節度使として活躍していた章阜の努力が着々と実を結

び、七八八年以後唐軍はこの地方においてしばしば吐蕃軍を破り、七九四年には遂に、それまで吐蕃と行動を共にしていた南詔をして大いに吐蕃を討たしめることにさえ成功したのである。このような吐蕃の東部・東南部国境地方における戦況の不利に鑑るとき、吐蕃に再び西州・北庭地方を奪還する余裕があったとは到底考えられないのである。

このような解釈にもし誤りがないとするならば、この跋文全体の内容も、本論で私が述べてきたような北庭戦後の西域情勢把握に、なんら障害を与えるものではない。それどころか、本跋文は、北庭争奪戦後のウイグルの西域進出を裏付ける新しい史料として、積極的に評価されて然るべきである。(東京大学人文科学研究科修士課程)

註及び参考

- (1) 田坂興道「中唐に於ける西北辺疆の情勢に就いて」(東方学報、東京、11—2)
- (2) 資治通鑑^{卷三}には「西域五十七国及十姓突厥」とある。明らかにこの方が正しい。
- (3) 田坂、前掲論文。羽田亨「唐代回鶻史の研究」(『羽田博士史学論文集・上巻歴史篇』一九五七)。安部健夫『ウイグル国史の研究』(一九五五)。佐藤長『古代チベット史研究 上・下』(一九五八—九)。
- (4) 安部、前掲書、p. 161
- (5) 東洋学報、55—3の書評を参照されたこと。
- (6) The Australian National University, Centre of

ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について

Oriental Studies, Occasional Paper No. 8; 1968, Canberra

- (7) 旧唐書迴紇伝には「十年秋」とある。これらを共に羽田氏は「六年秋」の誤りであるとした。一方、羽田氏とは別の理由から Eesedy も六年説をとっている。最近では佐口氏もこの説に従っている。然るに、本文で後述するように北庭争奪戦の勝者を吐蕃とみる田坂・佐藤阿氏は、「七年秋」が正しいとする。私は前者の方に従うが、今その理由を述べる余裕はない。羽田、前掲書、pp. 218—220; Eesedy, pp. 100—101; 佐口透『騎馬民族史2^{正史北狄伝}』(一九七二) p. 343; 田坂、前掲論文、p. 173; 佐藤、前掲書、p. 664 及び『騎馬民族史3^{正史北狄伝}』(一九七三) p. 184

森安

- (80) P. Pelliot "Histoire ancienne du Tibet." (Paris, 1961) p. 59. なお、漢文引用箇所全体に対する仏訳を参照のこと。
- (9) Ecsedy, note 9
- (10) 羽田「前掲書」p. 213
- (11) 安部「前掲書」p. 159
- (12) 本稿清書中に佐藤氏の両唐書吐蕃伝訳註(既出、注7)が出版された。いま問題になっている箇所の氏の解釈は私とまったく同意見である。
- (13) Ecsedy, note 11
- (14) 即ち廻紇伝では「利」を動詞ではなく「頡干利」という称号の一部と読ませている。「頡干利」を「頡干伽斯」の variant とみるのは不可能、と女史は言へ。
- (15) 原文は「羌」である。
- (16) 佐口「前掲書」p. 344
- (17) Mackerras, 本文中の「前掲書」p. 162, note 192
- (18) 安部「前掲書」pp. 159~160
- (19) 羽田「前掲書」p. 218
- (20) 同右 pp. 220~221
- (21) 安部「前掲書」pp. 168~169 & p. 201
- (22) 田坂「前掲論文」pp. 175~176
- (23) 佐藤「前掲書(注3)」p. 702 注⑤
- (24) 同右 p. 665 & p. 675
- (25) Ecsedy, p. 83
- (26) F. W. K. Müller "Ein Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch (Mahnâmâg)." (ABAW, 1912) Berlin, 1913
- (27) Müller は昭禮可汗(在位八二三~八三二年)とみなしているが(S. 29)「これは保義可汗とみる方が妥当と思われる。因みにこの二可汗は全く同じ称号を持っていた。田田信夫「九姓回鶻可汗の系譜」(東洋学報 33-3・4) (BSOS. IX-3, 1938) pp. 566~567. 田田「私は氏の説のほとんど賛成しているをわざわざ言わなければならない。」
- (28) A. von Le Coq "Ein manichäisches Buch-Fragment aus Chotscho." (Festschrift für V. Thomsen; Leipzig, 1912)
- (29) 同右 S. 149
- (30) W. Bang & A. von Gabain "Türkische Turfan-Texte. II." (SBABW, 1929) S. 413.
- (31) A. von Gabain "Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken." (Der Islam, XXIX, H. 1-2, 1949) SS. 58~59
- (32) 田坂興道「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」

(蒙古学報、2、一九四一) p. 232 注 32

(34) 安部、前掲書、pp. 207~210

(35) カラ=バルガッスン碑文のシンド語碑文は半羽同字は *pwktw* *y'y'n* など、*pw* は (O. Hansen "Zur soghdischen Inschrift auf dem dreisprachigen Denkmal von Karabalgasun," JSFOu, XLIV, 1930, S. 18), *pwktw* は前舌音系 *pw* の *bögü* に対応する *pw* の *bu* の *bu* 語彙とは混同され得なう。

(36) E. Chavannes et P. Pelliot "Un traité manichéen retrouvé en Chine." (JA, 1913, Jan.-Fév.) pp. 196~197, note. 羽田亨「回鶻文字考」(『羽田博士史学論文集・下巻』語宗教篇一九五八) pp. 10~11. *pw* は Chavannes, Pelliot 両氏は、「七六七年にウィグルの可汗がトルファン地方に対し特別の権力を有していたとは思われなう。いずれにせよ、帝国の中心は未だオルホン河流域にあつたに違ひなく、云々」と述べている。

(37) Le Coq は *ai-yin* をマコスタクの名前であるかのようには解したが、これは Clauson のように「言葉ゆい」と訳すべきである。G. Clauson "An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish." (Oxford, 1972) p. 270. *ai* は *ai-qaya* と読、*ai* は *ai* と月 *qaya* と岩の意を読みたろうとした Chavannes, Pelliot 両氏の説

ウィグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について

(後注 39) *pw* は *pw* と *pw* と。

(38) A. von Le Coq "Türkische Manichaica aus Chotscho. I." (ABAW, 1911, Nr. 6) S. 12

(39) Chavannes et Pelliot; op. cit. (JA. Mars-Avril, 1913) p. 381

(40) Gabain; op. cit., S. 60

(41) 通典卷四 薩宝府注に次のような記事がある。「開元二十一年七月勅、末摩尼法、本是邪見、妄称佛教、誑惑黎元、宜嚴加禁斷。以其西胡等既是鄉法、當身自行、不須科罪者。」
仏祖統紀卷五 僧史略下にもほぼ同様の記載がある。

(42) 石田幹之助「フー・フォン・ルコッタ『高昌古址発見トルコ文摩尼教遺文攷』第二冊」(東洋学報、12—3) pp. 142~143 注 5。矢吹慶輝「摩尼教」(岩波講座「東洋思潮」) p. 14。足利惲氏『ベルシア宗教思想』(一九七二) p. 109。F. W. K. Müller; op. cit., S. 36。なお、石田氏の論文は当該箇所が増補されて新たに『東亜文化史叢考』(東洋文庫刊、一九七三)中に収められた。

(43) 原文の "nom uluyt" を「教義の長」と訳し、それを "nom praśāṅgī" = "ispasak (薩波塞)" とみなすことにしたが、Gabain の前掲論文(前注 36) S. 51~52 を参照のこと。

(44) 国教とまで言い切ることには出来ない。洋の東西を問わ

森安

第五十五卷 四九一

ず従来の概説書はほとんどすべて「牟羽可汗のマニ教改宗以後、マニ教はウィグルの国教となった」と述べているが、これは速断にすぎる。この点に関しては別稿を用意している。

- (45) V. Minorsky "Tamin ibn Bahr's Journey to the Uyghurs" (BSOAS. XII-2, 1948)

(46) やはり二日ないし三日とある方が正しいと思われる。

- (47) 田坂、前掲論文、p. 186; 佐藤、前掲書(前注3)、p. 673. この点に関しては羽田氏にも明解がなかったらしく、「恐らく Kara Balgassun の都城の義なるべし」としてゐる。羽田、前掲書、p. 229

- (48) 松田壽男・森鹿三共編『アジア歴史地図』(一九六六) p. 107. 松田壽男「吐谷渾遣使考(下・完)」(史学雑誌、48—12)。森鹿三「新出敦煌石室遺書特に壽昌縣地鏡について」(『東洋学研究 歴史地理篇』一九七〇)。森氏の紹介する壽昌縣地鏡は、唐代のタリム盆地東南部に於て土蕃(吐蕃)が優勢な支配勢力であったことを明示している。なお土蕃と共に土谷、即ち吐谷渾の名が見えているが、このことは松田論文の内容に徴して注目に値する。一方カラハバルガッスン碑文には、龜茲を包囲攻撃中だった吐蕃軍が、龜茲救援に駆けつけたウィグル軍に敗られて于術に逃げ込んだ、という記載がみえる(第XVI行)。この于術とは龜茲

と焉耆の中間に位置する地名である(羽田、前掲書、p. 286, 注144)。

- (49) 松田壽男『古代天山の歴史地理学的研究(増補版)』(一九七〇) p. 60

- (50) ウィグル族とマニ教との関係については別に論ずる予定である。

- (51) 前註48を参照。ウィグルと吐蕃が龜茲で戦ったのは恐らく七九二年以後であろう。

- (52) 藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末(一—四)」(『東方学報』京都、12—3、13—2)。同「敦煌曆日譜」(『東方学報』京都、45)。

- (53) 上山大峻「曇倩訳『金剛壇広大清淨陀羅尼經』——八世紀安西における未伝漢訳經典——」(『竜谷大学論集』399号、一九七二)。

- (54) 原文には唐伊西庭節度留後使とあるが、これは唐伊西北庭節度留後使とするのが正しいであろう。本論に引用した旧唐書二〇「郭昕伝」に、伊西北庭節度使李元忠とあるのを参照。

- (55) この節の解釈に関し私は別の考えを持っているが、本論に直接関係ないので今は触れない。

- (56) 上山、前掲論文、p. 73—74. なお、すでに白須浄真氏はこれに賛意を表している。白須「吐蕃支配期の東西交通

——関隴朝貢道の途絶と西域朝貢使」(東洋史苑、六号、

一九七三、竜谷大学東洋史部会発行) p. 33 の注⑩

(57) 本論に引用した旧唐書^{卷九六}吐蕃伝の記事、および、これと対応する旧唐書^{卷九五}廻紇伝・貞元六年の条の記事を参照。

(58) 沙州の吐蕃への陥没年代については、七八一年説と七八七年説の二説があるが、白須氏によると最近では後者の方が有力だという。白須、前掲論文、p. 30

(59) 白須氏は伊州陥落の年代を、唐光啓元年書写沙州・伊州地志残卷(S.九三六、羽田、前掲書、p. 333)の記載によつて七六二年とみなしている。私はこれでは余りに早すぎると思うが、確証はない。白須、前掲論文、p. 33 の注⑥

(60) 元和郡県図志^{卷四}西州の条には、「西州貞観(元の誤り)七年(=七九一年)没於西蕃」とある。この西蕃が吐蕃を指すことは他の用例からも容易に推測される。

(61) 本論71ページをみよ。これと同内容の記事は唐会要^{卷九}廻紇の条、及び冊府元龜^{卷九五}・外臣部・交侵篇にもある。

(62) 安部氏は通鑑^{卷三四}・貞元十年(=七九四年)春正月の条の「先是吐蕃与回鶻争北庭、大戰。死傷甚衆。徵兵万人於雲南」という記事を引いて、これは七九〇年の勝ち戦さでの犠牲というよりは、七九一年の敗け戦さでの痛手とみる方が、よほど自然であること言うまでもなからう、と述

ウィグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について

べている。安部、前掲書、p. 169

(63) 旧唐書^{卷九五}廻紇伝。通鑑^{卷三四}貞元七年冬十二月の条。

(64) 旧唐書^{卷九五}廻紇伝及び冊府元龜^{卷九五}・外臣部・互市篇によれば、七九二年七月以前に早くもウィグルから使者が来り、多数の馬を絹と交換している。これは管見の及ぶ限りでは北庭戦後行なわれた最初の絹馬貿易である。(もっとも、上掲史料は七九〇年にも絹馬貿易の行なわれたことを伝えているが、この場合はとくに、「六月廻紇使移職伽津干帰蕃、賜馬価絹三十万匹」とあるところをみると、恐らくこの馬群を引き連れた一隊が唐に到着したのは七九〇年六月より数ヶ月前、従つてそれがウィグル本国を出発したのはそれより何ヶ月か前のことであつて、その時にはまだ北庭争奪戦は勃発していなかったものと思われる。)この点を考慮して私は、七九二年前半のうちに北庭戦は最終的な結末をみていた、と推測するのである。なお、この推測を積極的に裏付ける史料として、冊府元龜^{卷七三}・外臣部・助国討伐篇の「(貞元)八年(七九二年)正月、吐蕃与回鶻戦敗、徵兵於南詔蛮王異牟尋」という記事があげられる。(cf. 前注 62)。

(65) 佐藤、前掲書、p. 675-686

(一九七三年三月初稿、十二月補正)

森安